**説教20240107イザヤ42：1-9ルカ3：15-22「わたしの心に適う者」**

**昨日、１月6日は、毎年、主イエス顕現の日、とされていまして、全ての人にイエス様が姿を現された日です。昨日をもってクリスマスのシーズンは終わりました。今年も、主イエスによる救いの御業が、いたるところで成し遂げられますようお祈りいたします。**

**さて、昨年末にも、洗礼者ヨハネの話を何回も致しましたが、今日も洗礼者ヨハネが語られました。１２月１７日には、日出教会の早川あきや先生が「洗礼者ヨハネの証し」と題しまして、ひたすら謙虚にキリストを証したヨハネの姿を、キリストは有る者であり、ヨハネは無い者であるとして、ヨハネの徹底した謙遜さについて説教されました。そして、ヨハネの謙遜は、教会の姿勢であり、私たちの姿勢でもあり、謙虚にキリストをお迎えする姿勢を祈り求めようと締めくくられました。まことにアーメン、としか言いようがない説教であります。私たちは、最後まで謙遜であるならば、必ずや、主イエスによって救われることでしょう。**

**ところが、この謙遜をすすめる善い説教を聞いても、いざ、その謙遜をこの世で実行する段になると、どうしたらいいの、ということになってしまわないでしょうか。そうなってしまうのにはいくつかの理由が考えられます。先ず第一に、私たちは聖書が語る謙遜と言う言葉の意味をあまり理解していないということ。そして第二に、聖書が語る謙遜を、この世的な謙遜と取り違えているということ。第三に、その謙遜を行う元気がないということです。**

**それでは、謙遜ということについて少し黙想してまいりましょう。謙遜の反対語は高慢であります。この世の中は、高慢さに満ちています。その結果、弱い立場にいる人をいじめたり攻撃したりする、色々なハラスメントが横行するようになってしまいました。高慢さは人から人へと伝染していきます。今や、周りには沢山の高慢な人たちの見本があります。私たちは、この世の生活で、知らず知らずのうちに、その高慢さを見習って、自分自身もその高慢さを身に着けてしまうのです。**

**それでは、周りに謙遜な人たちの見本と言いますか、お手本となるような人が沢山いるか、と言いますと、謙遜な人と言うのはあまり見当たりません。私自身も、謙遜な牧師を目指して、努めていろいろな牧師たちと交わりを持ち、やり取りしてきましたが、彼ら彼女らのことをより深く知るにつれて、それぞれの人がそれぞれに、ある高慢さを身に着けてしまっていることが分って来て、がっかりしたこともあります。又、この様に語る私自身も、知らず知らずのうちに或る高慢さを身に着けてしまっていることでしょう。**

**パウロは、義人はいない、ひとりもいない。と言いましたが、この世には、謙遜な人も一人もいないと言った方が近いような気がいたします。**

**聖書が語る謙遜も、この様に、この世では実現しがたい謙遜であります。聖書の中で明らかに謙遜であると認められているのは二人だけです。**

**一人目はモーセです。民数記に次の様に記されています。**

**モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった。（12：3）**

**そして二人目はイエス・キリストです。**

**マタイ福音書 11章 29節**

**わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。**

**又、フィリピの信徒への手紙によりますと、キリストは、**

**自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、父なる神に従順でした。**

**この様に、聖書が語る謙遜は、キリストが父なる神に対して謙遜であり、十字架に至るまで、父なる神の言葉に従ったという従順のことです。そのキリストご自身の謙遜に倣って、私たちも謙遜でありなさいと、聖書は説いているのです。**

**ですから聖書が説く謙遜とは、私と主イエスとの関係であり、主イエスの御前に私が恐れひれ伏し、主イエスにすがりついて救いをこいねがう、私の低さのことを言っているのです。それゆえ、聖書が説く謙遜は、主イエスを礼拝することによってしか知ることが出来ないことで、この世で、人から謙遜を教えられる、ということは全くないとは言えないにしても、あまり期待しない方が良いことかも知れません。**

**そして、あまりこの世に期待しすぎますと、聖書が語る謙遜を、この世的な謙遜と取り違えている、ということが起こってしまうでしょう。試しに、この世の辞書で、謙遜を調べますと、一般的な意味として次の様に記されています。**

**謙遜とは、自己の能力や成果を控えめに表現する行為や態度を指す言葉である。自分の能力を過大に評価せず、他人の意見や立場を尊重することが含まれる。謙遜は、コミュニケーションの中で良好な人間関係を築くための重要な要素とされている。**

**この謙遜の意味は、間違ってはいないですが、聖書が説く謙遜、即ち私と主イエスとの関係のことについては述べていないので、この辞書的な意味だけで事足りて謙遜であるとするならば、信仰的には何も語っていないことになります。やはり謙遜には礼拝が不可欠なのです。**

**それでは、キリストは有る者であり、自分自身は無い者であるとした、洗礼者ヨハネ自身の謙遜な姿について観て参りましょう。**

**ヨハネの謙遜は、ヨハネ福音書３章16節での発言、「わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。」等を聞けばよく分かります。この様にヨハネはキリストをほめたたえ、自分はキリストの御前で低い者となったのでした。**

**日本の歴史を知る人なら、ここで豊臣秀吉が、信長の草履取りをしていたときに、信長の草履を懐に入れて温めていたという逸話を思い出されるかも知れません。信長は秀吉のその思いやりや気の利くところを評価した、ということになっています。それに比べ、聖書では、ヨハネは主イエスの御前に何ひとつ主イエスを喜ばせるようなことが出来ないことを告白しているだけです。これがヨハネの謙遜です。そしてこの謙遜な姿を見たイエスがヨハネを恵んで下さるのです。主イエスの恵みは、この様にひたすら謙遜な者たちに流れていくのです。そして高慢な者たちのほうへは流れて行かないのです。**

**段々と、聖書が説く謙遜と、この世の一般的な意味合いでの謙遜の違いが明らかになってきました。次に第三の、謙遜を行う元気について、ヨハネの姿から見て行きましょう。**

**御存じのようにヨハネは、旧約聖書に出て来る預言者たちに連なる最後の預言者として、この地上でエネルギッシュに活動しました。ヨハネは誰にもまして謙遜な人ではありましたが、ただ控えめにしている人物ではなかったのです。反対に、ヨハネは、謙遜であったがゆえに主イエスの恵みを豊かに受けて、主イエスに動かされて、じることなくキリストの福音を人々に宣べ伝えたと言えるでしょう。**

**「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」このヨハネの発言は、マタイ福音書にも記されていて、マタイ福音書ではファリサイ派やサドカイ派の人々に向かって発言したと記されています。**

**この発言から分かるように、ヨハネは、時の権力者であるファリサイ派やサドカイ派の人々を恐れてはいなかったのでした。**

**私たち人間は、この地上で恐れえる心を持っていますので、多くの場合、時の権力者を批判することに及び腰になります。時の権力者が悪いことをしようが、それを批判するよりは黙っている方が全く楽だからです。でも、謙遜なヨハネは、時の権力者を恐れることが全くなかったのでした。そして、ファリサイ派やサドカイ派の人々に対しても、悔い改めをすすめ、洗礼をすすめて、主イエスによる救いの福音を語ることが出来たのでした。**

**そして、ヨハネが時の領主ヘロデ大王によって牢獄に入れられた次第が次の様に簡潔に記されています。**

**ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。**

**ヘロディアとのこと、と言うのは、ヘロデ大王とへロディアの不倫関係のことで、当時の社会では知れ渡っていたことと思います。しかし、当時の領民は、そのことを誰も公には口にしなかったのです。ヘロデ大王が怖かったからです。しかし、ヨハネはこの公然の秘密である不倫関係のことを、恐れることなく公然と批判したのでした。ヨハネはこの時、ヘロデ大王にとってまことに不都合な人物だったのでした。だから彼は牢屋に入れられ、やがて首をはねられることになったのでした。**

**しかし、謙遜なヨハネは、そのヘロデ大王にさへも、悔い改めをすすめ、洗礼をすすめて、主イエスによる救いの福音を最後まで語ることが出来たのでした。**

**この様にしてヨハネは、ポンテオピラトの下に苦しみを受け十字架に付けられた主イエスと同じように、ヘロデ大王の下に苦しみを受け牢獄に入れられ、地上での生涯を終えたのでした。**

**聖書が説く謙遜は、忍耐と深いかかわりがあります。人間は、実際に自分自身が忍耐を経験することによって、聖書の御言葉によって慰められ、謙遜となって、悔い改めてキリストに生きる希望を抱くことが出来るのです。**

**今や、時代は天地創造の時代から、主イエスによる救いの時代へと移り変わっています。この救いの時代にあって、主は、地とそこに生ずるものを繰り広げておられます。そこにはヨハネの様に謙遜に生きる者の姿もあれば、ヘロデ大王の様に悪事千里を走るものの姿もあります。そして、私たち人間だけでは、まことの謙遜を示すことが出来ないように、何が善いことで何が悪いことかも私たち人間だけでは、とても判断できることではないのです。ですから、私たちは、ヨハネの様に、主イエスの御前に全く値打ちがない者としての謙遜な姿で、この地上を歩み、主イエスからの恵みを日々豊かに受け取って参りたいと願います。悔い改めるとは、十字架のイエスに従う謙遜のことです。私たちは謙遜であれば、「わたしの心に適う者」という天からの声を折に触れて聞くことが出来るでしょう。この救いの神秘を、新しい一週間も味わっていく事が出来ますように。**